

Title	コメント「学生の個性と大学教育」の観点から
Author(s)	向井, 俊彦
Citation	京都大学高等教育研究 (1997), 3: 134-137
Issue Date	1997-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/53511
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

コメント

「学生の個性と大学教育」の観点から

向井俊彦（立命館大学大学教育研究室前室長）

1. 2万人規模の私立総合大学にとって大学の個性とは何か。

現在、理工学部所属です。主たる担当が一般教育なものですから、所属学部が転々としています。

大学教育の個性化ということですが、残念ながら、私どものところで個性化というテーマで議論したことはありませんが、立命館の状況を私なりにふまえて発言します。新学部づくりや学部の改革、これが個性化の検討にあたると思います。大学ということで考えましたら、我々のところの学長が、我々が言うのは気恥ずかしいんですけども、「ベストユニバーシティー」ということを強調しております。それぞれの置かれた条件はいろいろあると思いますが、我々は一定の規模のある私立大学ということになるわけですが、こういう条件の中でできるだけいい大学をつくらうとするにはどうすればよいか、と考えることだと理解しています。例えば、私たちの大学の教学理念は平和と民主主義というんですけども、考えてみたらこんなにあたりまえな理念はないんじゃないかと思いますが、実はこれが特色になっていると思います。それで、そういう理念に基づいて、「国際平和ミュージアム」も持っているということになるわけです。それと、全学協議会方式という大学自治の考え方をしています。今2万5千人ぐらい学生がいるわけですが、これは武庫川女子大学の新堀通也先生の言葉になるんですけども、「異なった種別の総合」というのでしょうか、私立大学ですけども、大学院もそれなりに充実したいわけですし、全体は二万人を越える規模の大学で、非常に大衆的になっているということですね。その中で、入ってくる学生も多様であれば、学生の目指すべきものも多様で、さらにまだどこまでできるかを考えなければなりません、多様なプログラムを用意し、多様な卒業生を送り出そうと考えています。（補足ですが、文部省や大学審議会は、大学の高度化についてはそれなりの方針をもっていますが、生涯学習社会という理念以外には、大学の大量化については方針を持っていません。私は、大学進学率の向上を追認しているだけだと思います。大学の大量化の担い手は私学である、ここに日本の高等教育の、アメリカやスウェーデンとはちがう、基本的矛盾があると思います。）

それから、教育だけでなく、教育・研究・社会的貢献というんでしょうか、それぞれの在り方ということで、大学の個性を考える、そういう中での教育だということになるかと思っています。

さらに、個別の大学の個性ということが今日のテーマでしょうが、例えば京都という地域を考えて、大学、高等教育が、全体としてどう機能しているかということも、もちろん個性というよりも総合的に考えるということになるんでしょうけれども、「京都・大学センター」ができていますが、高等教育の活力ある地域として打ち出すことを、大学間協同として考えるということが必要になると思います。

それで、私は大学教育研究室というところの室長を2年間やりまして、その時に何を考えたかということ、研究室としての個性もある、同種の諸機関との関係でおのずと一定の役割を担っていると思うんですね。私は、広島大学や筑波大学、もっと大きな規模でやっておられる大学教育の研究所で、ご相談もさせていただきましたが、我々としましては、特に学生研究に見るべきものがでてくるような、そういう研究を我々の大学教育研究室のところで考えてはどうかというふうには思い、やってくるわけです。そういうことで、学生の個性と大学教育という観点からお話したいと思っています。

2. 入学者の多様性、進路の多様性。大量化した大学における青年の成長にとっての大学の位置をどう考えるか。

立命館なんかで考えますと、入学試験の種類もいっぱいあるわけです。スポーツ選抜や一芸入試で入ってくる者もいる。筆記試験的なものにも種類がたくさんあるということになるわけです。それで、どれだけの受験者の数があるかということも、大学としては重視しているということになっています。進路も非常に多様だということになるわけです。そういうことから、こういう大量化した大学における、青年の成長にとって大学とは何かということから、

あらためて考えることが必要だと思います。これまでは、古典的には、大学は「学問によって教養を磨くところ」であったと思いますが、学問によってだけではないという、そういうニュアンスで、「学問を軸として教養を得るところ」と書かせていただきました。4年間学生が大学という場所でどう成長するのか、地方から出てきて下宿するというのも学生にとってもものすごく大きな意味がある様子ですけれども、大学生活の全体ということですね。昨日はアメフトがありまして、立命館は残念ながら京大に負けましたが、大学における文化・スポーツ活動の占める比重も高くなっています。青年文化の拠点、演劇サークルなんかですと、いくつものは公認できない様子ですが、なかなかたくさん演劇サークルがあるということになるわけですけれども、そういう文化の拠点としての大学ということも、やっぱり考える必要があると思います。

ひと頃、大学のレジャーランド化という言葉がありましたけれども、私はそういうふうに大学教育をいう場合に、ある場合には、大学院に進学するような学生しか眼中になくて、言っている場合もありうると思います。そうではなくて、入ってきた学生みんなが、どう成長するのかということを考えることが必要だと思います。その時には、正課だけではなくて、課外のサークル活動とか、アルバイトとか、ボランティア、就職活動ですね。そういう全体、トータルの学生生活の中での学生の成長、そういうふうな観点が必要じゃないかと思います。学生にどう学んだかということで聞きますと、アルバイトなんかでもものすごく学ぶんです。つまり今の学生は、親以外の大人とつきあったことがあまりないんですね。だからそういう衝撃を受けて、そこで学ぶということになると思います。就職活動もものすごい勉強なわけです。就職活動がものすごくハードになっています。そういう経験が成長の場所になっているように思います。そういうことを全体として位置づけるということが、やっぱり必要じゃないかと思います。学生の震災ボランティア、大学としても支援しようと思いました。大学教育研究室でもこれらの経験の意味を現在研究中です。

3. 4年間での学生の成長の仕方をリアルに捉え、それを支援する観点をどう持つか。

そのためには、4年間での学生の成長の仕方を明確に捉えて、それを支援するという観点をどうもつかということですね。お渡ししました資料（「学生の自己到達度評価システム」の研究、立命館大学教育科学研究所報第18号、'95, 7）は、少しつたない文章ですけれども、15人の学生に4年間の学生生活、4回生の秋に聞き取りしたものの概略のまとめを中心にしています。そういうことをやりまして、去年から我々大学教育研究室のプロジェクトで、去年の1回生ですけれども、4年間同じ回生について調査する。ふたつの調査の仕方で、35人の小クラスの2クラスの学生に、一応4年間聞き取りさせてくれというふうにお願ひしまして、今年二年終わったところです。一年目は全員で70人ほど応えてくれたわけですけれども、二年目はお一人の先生が一手に引き受けてやっておられることになって、人数は若干減っています。そういうふうに片方でしながら、もう一方で同じ回生について、もう少し一般的に、学生二千人ぐらいの規模でアンケート調査をして、4年間で学生がどう成長しているのかということ、追跡できるような調査をしたいというふうに、今取り組んでいるところです。学生の身につける能力についていろんな場面で聞いていることが特色になっているかと思います。

そういうことに基づいて、大学教育の自己評価ということですね。立命館は、94年に第一回目の「大学白書」を出しまして、次は98年に出すことになりましたので、その時には、大学教育研究室は一定の提案をしないといけないということで、準備したいと考えているところです。

それから、学生自身には、サークル活動、自治活動、就職活動、いろいろな相談に応ずるような場所ということもあるわけです。学生部とか就職部とか、私学なんかではそういう部署が大きくなっているように思います。立命では、まだ国立大学で充実している学生相談室がないんですけれども、学生サポートシステムということで検討してはいますけれども'97年4月発足しました、いろいろな相談に応じる体制を、やっぱりきちんとしていくことが必要じゃないかと思います。それから、私、横から見ますと、教授会と学生部や就職部との関係です。学生部、就職部は課外活動や事件・事故、それから就職とかそういうことについて先鋭な問題意識をもって、何が課題かということを考えているわけです。しかし、教授会を見ますと、執行部や担当委員以外は、まだまだ余分な課題を押しつけられるというような感想になっているように思うんですね。それで、学生生活を全体としてみる観点、それには、教授会の正課について考えられているのと、学生部や就職部で考えているのとの、あわせるということが重要である。教授会が全体としてそういうことを合わせて、学生について考えるという観点をもつべき時代になりつつあると思います。

4. 学生の成長と、いろんなことをやりながら社会と自分を見つめ、選択能力を育成することの重要性。

そういうことで、学生の成長ということを考えますと、例えば選択能力というのが重要だと思いますけれども、ただそれだけそういうことを発揮しているのか、あるいは身につけようとしているかということがあるように思います。学部選択とか、ゼミ選択、就職選択。広島大学の卒業生アンケートを見て思うのですが、それにならって今、立命でも卒業生アンケートを取り組んでいるところですけども、結局高等学校の進路指導、進学指導ですね、これが何をやっているのだろうと後から思うんですね。学部選択ということで、本当に自分のやりたいことを考えながら、選択できている人がどれだけいるかという問題があると思います。ゼミ選択でも同じだと思います。例えば、立命の経済学部にいるとします。40人ちかい専門の先生がいます。ゼミ選択をするときに、一人の選択をする学生は、何人の専門の先生を知っているのかということがあると思うのです。ほとんどは評判と雰囲気で行っているというふうになっているんじゃないかと思います。ゼミの説明会がありますけれども、ほんの短時間で、一日に全部の先生が壇上につくような、そういう説明会でわかるのだろうかということがあると思います。就職についても、こちらはもちろん真剣に考えているとは思いますが、しかし社会についてのなんといいですか、これも世評ふうのイメージで考えている点もないわけではないのではないかと思います。正課の教学の中でも、できるだけ多くの教員を知る企画、学生の問題関心、勉強の動機づけを目標とするだけの企画があっただけではないか、また、卒業生の活躍ぶりやそこで必要な能力について知る企画が、正課の中にもあっただけではないかと思います。

それで、学生の聞き取りをしますと、一定の目標を持っている学生は、成長する、これはある意味では当たり前のように思いますけれども、そういうことを本当に考える時期じゃないかと思います。それから、リクルートとか福武書店とか、そういうところでやります、「学生生活満足度調査」を見ますと、学生と教員の間はものすごい疎遠といえますか、溝があって、何か相談事があっても、教員を相談相手に考えている学生はほとんどいないということになっているのが実状だと思います。

そういう中で、学生の、学習上の問題意識を明確にするためですけども、他の大学でもそうだと思いますが、立命でも、経済学部だったら経済学で一つということではなくて、スポーツでとか、あるいは外国語の副専攻とかそういうのを、高度にやっていくというカリキュラム企画を工夫してきているということがあるわけです。さらに「インスティテュート」といいますのは、これは立命用語かもしれませんが、副専攻と本来の専攻とのちょうど間くらいに当たると思います。単純に新しい専攻をつくるのではなく、専攻の壁を取り払ったというふうなことで、副専攻にもできれば、専攻にもできるというものですけれども、文学部で始めまして、経済、経営学部が草津に移転（98年ですけども）する時には、草津キャンパスでも理工学部を含めて三学部にふさわしいものを考えるということになっています。

それから、「エクステンション」、これは就職活動のための、大学キャンパスの中にある専門学校みたいな感じになっているわけですが、そういうこともあります。同じ司法試験を目指すということでも、同じ科目が大学の授業にも何科目もあるわけですね。だけれど受けているんですね。まわりの学生の、参加している学生の姿勢が違うからこちらの方が勉強になりますとか、こういうふうに学生の感想が入っていたりするわけです。同時にまた学生に聞きますと、「学生のためには、なりふり構わずやってくれるような、そういう大学であって欲しい」とか、そういう言い方もありまして、「エクステンション」というのもそれなりに成長しているというふうになる。

それで私の言いたいことは、比較的ある分野に関心を持ち、そこに熱意があって、やっていく学生については、それをつかむシステムをそれなりに開発してきている、そういうふうになっているわけです。それから問題を起こす学生も、学生部や教授会で指導をしないといけない、ということになっています。ですけど、その間の普通の学生というのでしょうか、サークルに入っている学生はいいんですけども、サークルに入っていないで普通に授業を受けているだけの学生というのを、大学はどのように考えているのか、ということがあると思います。この間、学生自治会のスローガンというか、廊下のステッカーを見ていましたら、A学部の教授会は学生の半分しか見ていないとか、そう批判している言葉がありました。それをどう考えるかということがあると思います。

この意味で、あらためて4年間一貫した小集団教育体系をつくるということが必要だと思います。立命はこういうふうに来てきたのですが、いろいろ大学改革をするために、二回生の小クラス、「講読」をつぶして、それでいろいろなことを展開したという経過があるわけです。それによって相当新しい試みをやってきたわけですが、あらため

て、4年間一貫した小集団教育体系を作る時期だと思います。立命の中でもいろいろな学部がありまして、法、経、営、産社、いわゆる社系の4学部は財政に貢献する学部みたいになっている点が、ないわけではない。後4つ、理工、文、国際、政策がありますけれども、それらの学部では、二回生にも基礎演習をずっと置いています。

それで、クラス担任が必要じゃないかと私は思います。現在は基礎演習がありますけれども、それは基礎演習という科目の担当者です。学生から見て、低回生の学生でも自分の指導教員というのがあって、自分が大学生生活上相談事があったら、比較的気楽に相談に応じてくれる人、そういうふうに構えてくれていると見えることが大事だと思います。学生は進路のことをはじめいろいろ迷っています。そういう相談を比較的気楽にできるような先生がいるということが、非常に重要だと思います。オフィスアワーということが強調されますけれども、一般的にそういうことを置いて、それが意味のあるようになるかどうかは、私はあやしいと思います。その前の環境がまだできていないということになっていると思います。

クラス担任としては何をするのか、学生が学生生活の目標、将来のことをどういうふう考えているか、一年に一回くらい、その担当教員が聞いてやるということが必要じゃないかだと思います。それで作文を書かしてもいいし、7、8人集めて懇談をしてもいいと思いますけれども、これは聞いてあげるということが、学生にとって非常にいいと思います。我々は、教えたがりやということになるわけですが、きちんとまじめに勉強しろというのではなくて、勉強以外のことに目標として力点があったとしても、それを聞いてあげるということが、学生の成長にとって意味があるのではないかと思います。

私は一般教育の意義を考える立場にもあるわけですが、この点では、設置基準の大綱化以降、東京大学以外は結局、一般教育を縮小・軽視することになってしまっていますが、新しい教養教育の必要性はどのように意識されてくるのだろうか、旧来の蒸し返しの主張ではなく、学生の実状をよくふまえて新しく考えなければならないと思います。